

モンゴル医学と薬物

小松かつ子

出口鳴美

(富山大学和漢医薬学総合研究所)

1. 医学史

モンゴルではチンギス・ハーンを抜きにして何も語ることができないが、医学についても同様である。民族統一がなされた 1206 年以降、拡大された版図の地域間、さらには中国、アラビア、ヨーロッパとの交流により様々な医薬に関する理論や薬物がモンゴルに伝えられた。インド医学（アーユルヴェーダ）との接触は 14 世紀のことで、仏典である『金光明経』を介してであった。この書には 3 体液説を含むアーユルヴェーダの各種理論が展開されているが、この書がウイグル・チベット両言語からモンゴル語に翻訳され、モンゴル医学の理論の形成に大きな影響を与えたとされる。これに続いて 16 世紀後半以降、チベット仏教とともにチベット医学の聖典である『ギュー・シ（四部医典）』が伝播する。また、17、18 世紀には『チベット大蔵経』がモンゴル語に翻訳され、その中の丹珠爾に納められているアーユルヴェーダ文献もモンゴル語に訳され普及することになった。こうしてアーユルヴェーダが仏典を介して直接に、またはチベット医学を経由してモンゴル民族の間に普及した。一方、外来文化が入る以前から行われていた遊牧民族固有の外科的治療法（動物の皮や臓器を用いる罨法、灸・針刺療法、瀉血療法）や食餌・栄養療法（『飲膳正要』）も興隆し、チベット医学と対立していたが、17 世紀末頃から両者を融合させる動きが現れた。さらにこの時期『本草綱目』など中国の医薬書もモンゴル語に翻訳されており、中国医学の影響をも受けて近代モンゴル医学が形成された。

2. 医学理論（中国内蒙古自治区での 1994 年の調査から）

モンゴル医学はチベット医学やその源のアーユルヴェーダと同様に、3 要素学説（トリ・ドーシャ理論）を中心にした医学理論をもつ。3 要素とは、ヒー（中国では赫依、モンゴル国では Hii）、シラ（協日、Shar）、バドゲン（巴達干、Badgana）であり、それぞれチベット医学のルン、チーパ、ベーケン、アーユルヴェーダのヴァータ、ピッタ、カパに対応する。ヒーは気（風）に相当し、人体を正常に働かせる動力源、シラは胆（火）に相当し、内臓機能の活力の基で消化や代謝を司り、失調すると熱病を引き起こす。バドゲンは痰（粘液）に相当し、体液の保持と密接に関係し、失調すると寒病を引き起こす。寒・熱の理論は『ギュー・シ』でも見られるが、18 世紀のイシバルジュル（『四部

甘露』などに記される)によりさらに体系化され、寒病、熱病、寒・熱対立の疾病に分けられた。イシバルジュルは3要素にさらに血、黄水、虫を加えて、これら6種の疾病が「基本的な6病」であるとの理論を確立した。一方、生薬に関しては、5元素(土、水、火、気、空)が薬用植物の生長過程で微妙かつ複雑な作用を与えて、6味(甘、酸、鹹、苦、辛、渋)をもたらすとする。さらに生薬の基本的な性質は「2基」、「8性」、「17效」の概念にまとめられる。2基とは陰基と陽基を指し、寒力と熱力とも称される。8性は重、膩(油)、寒、鈍、軽、糙、熱、鋭の薬性を指す。重膩性の生薬を用いてヒーの病すなわち、神経衰弱、精神病、疲労倦怠、健忘、耳鳴り、手足のしびれなどを治療する。寒鈍性の生薬を用いてシラの病すなわち、口苦、煩渴、胃酸、嘔吐、下痢、黄疸などを治療する。軽糙性及び熱鋭性の生薬を用いてバドゲンの病すなわち、悪心、嘔吐、消化不良、食欲不振、胃痛、腰痛、肥満症を治療する。生薬はこれらの8性に柔、温、軟、穩、燥、渋、動、涼、泄を加えた計17種の効能に分けて把握でき、疾病の20通りの状況に運用して疾病を治療する。

診断は問診、脈診、尿診などの他に、外傷や脱臼、脳震盪の診察など遊牧民族特有の疾病に関する診断法が加わる。尿診では尿の色、臭気、沈殿物などで熱性・寒性の別を判断する。

3. 治療方法

疾病を治療する概念には飲食、起居、内治法(内服治療法)、外治法(外部治療法)の4つがあり、これらを組み合わせて治療する。一般には外治法を最後に行う。内治法では馬乳酒を利用した食餌療法に、外治法では柔治法の中の外部療法や整脳術(振動療法)、接骨術など、遊牧生活から発した療法にモンゴル医学の特徴が見られる。調査で訪れたモンゴル医院(蒙医院)には蒙医五療室という診察室が設けられていたが、これもチベット医院(蔵医院)では見られなかったものである。蒙医五療とは、針灸、按摩、放血、推拿、整脳術を指す。

外治法には大きく分けて、硬治法、強治法(強刺激)及び柔治法の3方法があり、硬治法には割治療法(切除術)、刮治療法、切治療法(開刀術)及び穿刺療法がある。強治法には針刺(火針)、火灸(リウマチ等に応用、中医学に近い)、特別な針を差し込んで行う放血(瀉血)があり、放血は『ギュー・シ』中に蒙古から伝わると記されている。柔治法には鉱泉療法、薬浴などの水療法と外部療法がある。外部療法には、ラクダの乳やバター、モンゴル酒と銀碗を使って行う按摩(リウマチや挫傷に応用)、セブス療法と称し、馬や羊の胃袋の熱を人体に浸み込ませて痛風、リウマチ、子宮の寒性の病気を治療する方法、皮罨療法と称し、動物を殺して直ちに皮を剥ぎ取りその熱い皮を身体にかぶせるかまたは患部に巻いてリウマチ性関節炎(羊の皮を使用)や通風、風湿病、黄水性の病気(ろばの皮を使用)を治療する方法、及び臓罨療法と称し、羊を殺して五臓を取り熱い内に人体の特定の部位に当てて熱を浸み込ませる療法がある。その他、「以震治震」の理論に基づいて、脳震盪などの振動による障害を、振動させることによって

治療する整脳術、及び接骨術がある。

内治法には食餌療法と薬物療法がある。馬乳酒は高血圧、心臓病、肺結核、胃腸病、神経衰弱、水腫、リウマチなどに補佐薬として用いられる。薬物療法では生薬単味より処方にして用いられる場合が多い。伝統処方経験方を含めると約 1,200 種類あり、その内 150~200 種類が常用される。それらは散剤、丸剤、湯剤、膏（エキス）剤、酒剤、油剤、灰剤、攪合剤、草薬剤（動物及び鉱物性の生薬を含まないもの）、金石合剤などに製造されるが、散剤が最も多用される。その他、油療法、減弱療法である吐法、瀉下、灌腸、利尿が行われる。方剤の服用時間には朝、昼、晩、食前、食間、食後、就寝前、空腹時など 10 通りがある。患者の病状や体調により異なる時間に異なる方剤を投与する。朝、昼、晩で投薬する方剤を変えることがあるが、これには理論的な根拠がある。例えばシラ（アーユルヴェーダのピッタに対応）の活動時間は 0 時と 12 時であり、シラ病を治療する場合はこの時間に投薬する。このように時間により、またある場合は季節により方剤を変える。

4. モンゴル生薬

19 世紀の著名な蒙薬学者のジャンバルドルジは、『美しき目の飾り（蒙医本草、蒙薬正典）』をチベット語で著した。これはモンゴル薬物学の系統的な古典とされ、その中で 897 種の薬物について漢名とチベット名、産地、形態、味、性質、効能、薬用部位、採集時期、調製方法などが詳細に解説される。その内、植物薬は 62%、動物薬は 24%、鉱物薬は 14% を占める。現在モンゴル薬物は 2,200 余種があり、その内 1,342 種を常用する。モンゴル医学はチベット医学とも中国医学とも交流してきたため、それぞれの医学で用いられる生薬も交叉する現象が見られる。モンゴル医学で専門に用いられ、中国医学では全くまたは余り用いられていない生薬は 300 余種にすぎない。例えば、文冠木（*Xanthoceras sorbifolia* Bunge の材：酒剤で用い、清熱燥湿の効があり風湿性関節炎を治療する）、沙棘（*Hippophae rhamnoides* L. の果実：止咳去痰、活血化癥薬）、広酸棗（*Choerospondias axillaris* Burt et Hill の果実：鎮静薬として心臓病の治療に用いる）など。また、草烏（*Aconitum kusnezoffii* Rchb.：塊根以外に葉、芽、花などが用いられる）のように漢薬と薬用部位が異なる生薬もある。さらに、中国医学とモンゴル医学でともに用いられるが、各々の理論が異なるために用法が異なるものもある。例えば、中国医学で繁用される甘草（*Glycyrrhiza uralensis* Fischer の根）はモンゴル医学では止咳化痰薬または最近では解毒、滋養薬としての応用に限られる。反対に、訶子（*Terminalia chebura* Retz. の果実）は中国医学では余り使われないが、モンゴル医学では最も常用される薬物の一つである。現代研究により収斂、止瀉、抗菌、抗痙攣、利胆、血圧降下及び強心作用が報告されている。肉苁蓉や鎖陽は中国医学では強壯、強精薬とされるが、モンゴル医学ではともに胃寒、胃酸過多に用いられる。さらに、モンゴル医学では生薬の炮制を重要視し、牛乳、羊乳、ヨーグルト、羊脂、訶子湯などが炮制に用いられる。

5. モンゴル薬物とチベット薬物の比較

モンゴル医学における生薬の用法や方剤の構成生薬と応用はチベット医学とほぼ同様であったが、生薬の原植物については名称が同じでも異なるようであった（異物同名品）。

2001 年～2002 年にモンゴル国において、有用植物目録作成に係わる薬用植物調査（JICA 事業）を行い、2003 年に『モンゴル国有用植物図鑑』を作成した。この図鑑には 227 種類の有用植物を収載し、それらの植物形態、分布、植生などとともにモンゴル伝統薬における薬効やチベット名を収載した。一方、2001 年の調査でウランバートルにある Hepatological Clinical Centre of Traditional Medicine で使用している生薬の一部を入手した。これらを、チベット生薬データベースに登録済みの学術情報と比較し、異物同名品の実態を調べた。すなわち、同じチベット名を持つモンゴル国薬用植物（または生薬）とチベット生薬（原植物）を比較した。55 種類を対象にして、チベット名が同一で、両者の植物種が同一または近縁なもの（1）、両者の植物種が属する「属 genus」が同一なもの（2）、「科 family」が同一なもの（3）、全く異なる植物が用いられるもの（4）に分けた。それぞれに該当する生薬（植物）は以下のである。両者で植物種が異なるものは、チベット医学での原植物、モンゴル医学での原植の順序で記す。なお、（1）以外は種名を省いた。

（1）Go-snyod (*Carum carvi* L.)、Bre-ga (*Thlaspi arvense* L.)、mDzo-mo-shing (*Caragana jubata* (Pall.) Poir.)、Shing-mngar (*Glycyrrhiza uralensis* Fisch.)、sPang-rgyan (*Gentiana algida* Pall.他)、Pri-yang-ku (*Dracocephalum foetidum* Bunge)、dByi-mong (*Clematis tangutica* (Maxim.) Korsh.)、gZe-ma (*Tribulus terrestris* L.)、Ma-nu (*Inula helenium* L.)、Srad-dkar (*Astragalus mongholicus* Bunge)、sTar-bu (*Hippophae rhamnoides* L.) など

（2）Da-lis (*Rhododendron* sp.)、dBang-lag (*Gymnadenia* sp.)、Khur-mang (*Taraxacum* sp.)、sKyer-pa (*Berberis* sp.)、Ra-mnye (*Polygonatum* sp.)、Lug-mig (*Aster* sp.)、Tha-ram (*Plantago* sp.)、Tshan-dmar (*Rhodiola* sp.)、mTshe-ldum (*Ephedra* sp.)、sTag-sha (*Oxytropis* sp.)、lCum-rtsa (*Rheum* sp.)、Bya-rkang (*Delphinium* sp.)、Se-rgod (*Rosa* sp.) など

（3）Klu-bdud rdo-rje（キキョウ科の *Codonopsis* 属(チベット)と *Adenophora* 属(モンゴル))、Zangs-tig(リンドウ科の *Swertia* 属または *Lomatogonium* 属と *Halenia* 属)、A-bhi-kha（ユリ科の *Fritillaria* 属と *Lilium* 属)、Om-bu（ギョリュウ科の *Myricaria* 属と *Tamarix* 属)、sPang-spos（オミナエシ科の *Nardostachys* 属と *Valeriana* 属)、Ru-rta（キク科の *Aucklandia* 属と *Echinops* 属) など

（4）Kanda-kari（バラ科 *Rubus* 属とスイカズラ科 *Sambucus* 属)、Ba-sha-ka（キツネノマゴ科 *Justicia* 属とナデシコ科 *Dianthus* 属)、gSer-gyi-me-tog（ウリ科 *Herpetospermum* 属とユリ科 *Hemerocallis* 属)、Gang-ga-chmg(リンドウ科 *Gentiana*

属とシソ科 *Leonurus* 属)、Ut-pal (ケシ科 *Meconopsis* 属とキンポウゲ科 *Aquilegia* 属)、sKyu-ru (トウダイグサ科 *Phyllanthus* 属とバラ科 *Crataegus* 属、*Malus* 属または *Padus* 属)、Par-pa-ta (ケシ科 *Hypecoum* 属とキンポウゲ科 *Adonis* 属) など

以上をまとめると、チベット生薬と同一のチベット名をもつモンゴル国薬用植物が、チベット生薬の原植物と同一または同属の植物であるものの割合は約 60%であった。一方、全く異なる科の植物が、同じ名称で、同じ薬効を期待されて使用されていることも明らかになった。同属の植物であっても種により成分組成は異なり、科が異なればその違いは明白である。モンゴル国における使用のきっかけは、形態の類似性や薬効の類似性などからであろうが、今後、安全性や有効性の上から科学的な研究が必要であると考えられた。さらに、モンゴルの病院では、Hong-len と称して、本来のゴマノハグサ科の *Picrorhiza scrophulariiflora* Pennell の根茎ではなく、キンポウゲ科の *Coptis chinensis* Franch. の根茎が使用されていた。チベット医学では Hong-len (漢薬名「胡黄連」) は熱性疾患、肝臓疾患、神経疾患に応用され、一方、後者は健胃、止瀉、鎮静、消炎薬とされる「黄連」である。消炎作用は類似するが、別生薬である。また、Nye-shing と称してユリ科の *Asparagus* 属ではなく漢薬の「茜草」(浄血、止血、通経薬) が使用されており、本来の強壯薬としての薬効は果たせないのではないかと考えられた。このように、中国の漢薬がモンゴル医学の病院で使用され、その用法に誤りがある可能性が示唆された。

近隣諸国で生薬が相互交流して使用されている場合には、まず、原植物や薬効の類似性に注目して詳細な吟味を行い、安全性と有効性を確かめた上で使用する必要がある。また、自国の伝統医学を正しく継承する場合には、自国産の生薬の保護に努めてほしいものと思われた。

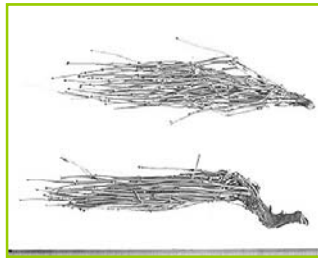
付 表

Da-lis (*Rhododendron* sp.)、mTshe-ldum (*Ephedra* sp.)、sKyu-ru (トウダイグサ科 *Phyllanthus* 属とバラ科 *Malus* 属)、Nye-shing (植物は *Asparagus* 属、生薬は茜草) の比較例

モンゴル名

Daguur Zeergene (Nangiad Zergene)

モンゴル生薬写真



モンゴル植物写真 1



モンゴル植物写真 2



チベット生薬写真



Remarks

Mongolia:

Tibetan: 11485 (E. intermedia, aerial part)

チベット 語名

mtshe-ldum (mTshe-ldum)

原植物名

Ephedra dahurica Turcz.
(=E. sinica Stapf)

原植物科名

Ephedraceae

使用部位

地上部, 緑色の枝

味

苦, 辛, 渋

薬力

涼, 粗, 軽

薬効

出血、往来寒熱、湿熱、損傷から到った気 (Hii)と血(Shar)の病氣、脾熱、肝熱、傷風による熱を治療する。腫瘍を去り、血を止める。

Tibetan name

mTshe-ldum (Tse-dum)

Scientific name

Ephedra intermedia Schrenk et C.A.Mey.
or *E. gerardiana*, *Ephedra* sp.

Family name

Ephedraceae

Part used

Aerial part

Taste

Bitter

Potency

Cooling

Medicinal uses

It is a rejuvenating agent and is useful in the treatment of haemorrhage, hot disorders of the gall bladder, liver, spleen and in all kinds of initial and chronic stage of fevers.

Chin name

麻黄

Ref

152

モンゴル名

Daguur Terelj

モンゴル生薬写真



チベット生薬写真



モンゴル植物写真 1



モンゴル植物写真 2



Remarks

Mongolia: 21223 (R. adamsii)

Tibetan: 14906 (R. hypenanthum, flower), "nag-po" is black flower

チベット語名

da-lis (Dava-lis)

原植物名

Rhododendron dauricum L.

原植物科名

Ericaceae

使用部位

花

味

苦, 辛, 渋

薬力

軽, 温, 干

薬効

肺気腫、四肢の浮腫、肺病、肺熱、声がすれ、気候風土に体が合わないものを治療し、体のバランスを戻す。

Tibetan name

Da-lis-nag-po (Da-li-nag-po)

Scientific name

Rhododendron hypenanthum Balf.f.
or Rhododendron sp.

Family name

Ericaceae

Part used

Flower, leaf

Taste

Hot

Potency

Warm

Medicinal uses

It is used for all kinds of cold disorders. Bath prepared from the leaves is useful in treating diphtheria and sudden swelling.

Chin name

杜鹃

Ref

290

モンゴル名

Jimsenet Alim

モンゴル生薬写真



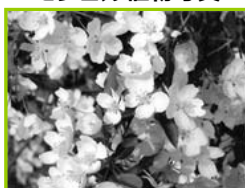
チベット生薬写真



モンゴル植物写真 1



モンゴル植物写真 2



Remarks

Mongolia:
Tibetan: 4492 (P. emblica, fruits)

チベット語名

skyu-ru-ra, khra-ma (sKyu-ru-ra)

原植物名

Malus baccata (L.) Borkh.
(=M.pallasiana Juz.)

原植物科名

Rosaceae

使用部位

果実

味

酸, 渋

薬力

涼, 鈍, 粗

薬効

血の滞りと血熱を治療する。消化を促進し食欲を増す。できもの、子宮疾患、肺疾患、脾臓疾患、痰、Badagana の病気、黄疸、虚熱、黄水病に応用する。脱毛にも有効。

Tibetan name

sKyu-ru (Kyu-ru)

Scientific name

Phyllanthus emblica L.

Family name

Euphorbiaceae

Part used

Fruits

Taste

Sour to astringent

Potency

Cooling

Medicinal uses

It helps maintaining the balance of three Nyes-pas; it treats disorders of Bad-Kan and mKhris-pa; it also relieves excessive impure blood, hot disorders of blood and gall bladder, polyuria and loosing hair.

Chin name

余甘子

Ref

mdb

モンゴル名

Nishin (hereen hud)

モンゴル生薬写真



茜草

チベット生薬写真



モンゴル植物写真 1



モンゴル植物写真 2



Remarks

Mongolia: 21193 (Asparagus sp., roots)
Info/plant photo from A. gobicus
Tibetan: 6492 (A. myriacanthus, roots)

チベット語名

Nye-shing (based on Mongolian name)

原植物名

Asparagus sp.
or A. gobicus Ivanora ex Grub.

原植物科名

Asparagaceae

使用部位

根

味

甘, 苦, 渋

薬力

軽, 温, 干

薬効

体力増強、長寿、補腎薬として、腰痛、原因不明の慢性の熱、角膜炎、白内障、子宮溢血、大便乾燥、糖尿病、皮膚病などに応用する。関節の疼痛に用いる最良薬。

Tibetan name

Nye-shing (Nye-shing)

Scientific name

Asparagus myriacanthus F.T.Wang et S.C.Chen
or A. adscendens, Asparagus sp.

Family name

Asparagaceae

Part used

Root

Taste

Bitter&astringent to
sweet

Potency

Warming

Medicinal uses

It restores physical vigour and alleviates pain in kidney and the waist region. It is used for polyuria, shu-thor (skin rashes) and itching. It is also effective against diseases of serous fluid associated with cold nature.

Chin name

天門冬

Ref

mdb, 82